

会 議 名	第1回前橋市立図書館新本館構想策定プロジェクト会議
日 時	令和3年10月14日(火) 16:00~17:10 図書館地下講堂
出 席 者	吉川教育長、藤井教育次長、都所指導担当次長、金井都市計画部長、 片貝総務課長、井野教育施設課長、関口生涯学習課長、金井教育プラザ館長、 若島図書館長、飯塚市街地整備課長、山村主任 【外部委員】 福田理事長(前橋工科大学)、植木理事長(前橋中心商店街協同組合)、 稲田専務理事(前橋商工会議所)、日下田企画局長(前橋デザインコミッション)
教育長	【開会】 規約に基づき、教育長が議長となる。 手元の次第に基づいて進め、すべての議題の説明が終わった後に質疑応答の時間をとる。 まず議題1、市街地再開発事業の進捗状況について事務局から説明をお願いしたい。
市街地整備課長	議題1 市街地再開発事業の進捗状況についての説明
教育長	続いて議題2、図書館新本館基本構想の策定スケジュールについて担当の図書館から説明をお願いしたい。
図書館長 教育長	議題2 図書館新本館基本構想の策定スケジュールについての説明 続いて議題3、市民ワークショップの開催報告について担当の図書館から説明をお願いしたい。
図書館長	議題3 市民ワークショップの開催報告についての説明
委員	【委員自己紹介】 【意見交換】 スケジュールがあったが、いつまでに何を決めたらいいかを具体的に示してもらいたい。県と市の図書館は一体にはできないのか。高知は、建物は一緒に館長は二人いるというような失敗事例と言われているが、本当に一体化した図書館はできないのか。 前橋は5大学あるが、それぞれの大学が図書館を持っていて専門性が高い。前橋工科大学は建築関係や電子工学など、群馬大学医学部はそれに応じたものがある。それらを一体とした、前橋としてのバーチャルな総合図書館のようなものが街中であって、例えばそこで手続きをしたら、市立図書館にはないが群馬大学にはあるものを宅急便で送ってもらえるというのもいいかと思う。県立、

市立、大学の図書館を一体運営できるような形がとれないのか。

もう一点、前橋を説明する時に、例えばシリコンバレーはコンピュータやインターネットの中心都市だが、前橋はシルクの中心都市だという説明をすると、みなさん感激する。実際新前橋の繭糸取引所で世界中の生糸の相場を決めていた。そういうことを考えると、前橋市立図書館はシルクに関する図書が一番揃っているというような特徴づけが何かできないか。図書館というと住民の基本ニーズから考えると似たり寄ったりだと思うが、この研究だったら前橋の図書館に行かないと駄目だとなるような前橋の特徴を示す必要があると思う。

生糸は一つの例だが、生糸図書館のようなものを名前として併設するなど、何か特徴を出すことが大事だと思う。

最後に、よく創造力、イマジネーション、クリエイティブなどはどうやったら育つかをよく聞かれるが、新卒で学生が入ってきて仕事をしてみて、最後に小説をいつ読んだと聞くと、ずいぶん記憶にない学生が結構いる。結構優秀な俗にいう名の通った大学を出てもそういう人はいる。なぜそういうことが分かるかという小説をたくさん読んでいる子はクリエイティビティが高い。これは研究でも色々出てくる部分ではあるが、小説で例えば前橋市立図書館の地下の講堂で会議ということが書いてあると、自然にビジュアルで頭の中に変換している。文字で入ったものを頭の中でクリエイトしている。これをやっている人はクリエイティビティが高い。いわゆるノウハウ本的なものばかり読んでいる人は、知識は多いがクリエイティビティが低いというのが顕著に出る。そういった意味で、小さい時から小説・物語の類に慣れ親しむことができればすごく良いと思う。その部分は最初の頃が勝負だが、小学校低学年くらいで方向性は決まってしまう。読む子は凄いペースで読んでしまうので、気軽に図書館で本を読めれば本好きになる。子どもが4、5歳になったら絶対前橋市立図書館に行かないと駄目だという人たちが市内だけでなく色々なところから集まってくるにはどうしたらよいか、という発想を検討してもらいたい。

教育長

県と市の連携については現在どのような形になっているか。

図書館長

縣市連携プロジェクトチームが設立され、県立図書館の方向性や市立図書館との機能統合をどうしたらよいか、という部分について回数を重ねて協議をしている。具体的なことについては決まっていない。県立もあり方検討会を立ち上げ、これから県立図書館の方向性を考えたいということで、前橋の新本館プロジェクトチームとも連携をとりながら、どういったサービスを一緒に作り上げていったらよいかを詰めていきたいと考えている。重複したものの洗い出し等もこれから進めていく状況。大学との連携については、大学の認可にあたって図書館を併設する条件があるため、大学で図書館をもつのが一般的な状況となっている。ただ、大学の図書館も最近では広く一般に開放されて、市民が利用できるような使い方をされているため、大学との連携も考えていかなければならないと考えている。また県立図書館の役割としては、専門性の高い資料を収集・保管していくという大きな役割があるため、県立や県内各市立図書館そして大学と連携を図れば、より充実した読書・研究の環境が生まれるものと思っているが、今後の検討となっている。

県立や一部県内図書館との相互利用は行っており、前橋で持っていない資料に

	<p>ついて県立や他の市町村等から取り寄せたり、逆に前橋の資料を貸し出したりということが可能となっている。今後、その部分もオンラインなどで効果的に利用できるようなになればよいと思っている。</p> <p>シルクを図書館にという発想は全く頭になかったが、前橋とシルクは切っても切れない関係性があるので、新図書館についてもシルクに限らず特徴を打ち出していく必要があると思っている。今後の図書館構想にも入れ込んでいきたいと考えている。</p> <p>子どもたちへの読書普及の働きかけについては、0から18歳を対象としているこども図書館が本館とは別にある。そこでは0歳からのブックスタート事業として赤ちゃんへ本をプレゼントしたり、読み聞かせ事業をしたりと頻繁に行っている。現在はコロナの影響で十分に実施できているとは言えないが、引き続き行っていきたい。ただこども図書館の年齢層が未就学児童ということから、お母さんと一緒にきて楽しむという部分が多いため、小学校入学以降の児童等についても今後は学校図書館との連携を考えながら、本に慣れ親しめるような取り組みを行っていきたい。</p>
教育長	<p>福田理事長から質問のあった、図書館のプロジェクトでいつまでに何をというスケジュールについて説明願いたい。</p>
市街地整備課長	<p>再開発で整備していくということで、再開発のスケジュールでも街区ごとの配置はまだ確定ではないため決定事項ではないが、東街区で整備となったことを想定すると着工が令和8年か9年くらいになるため、それまでには中身を含めた全ての設計まで終えている必要がある。それから逆算していくと、基本構想、基本計画、設計が令和6年から8年となってくると思う。ただスケジュールとしてはまだ確定ではない。</p>
理事長	<p>基本構想案の中にはどういったことが盛り込まれた状態まで決めないといけないのか。</p>
事務局	<p>資料2-1にて示した図書館新本館基本構想については、新しくできる前橋市立図書館でどういったサービスを提供していくかのヴィジョンになる。市立図書館の歴史を継承や、新しい社会でのテクノロジーの進展へ対応するためのサービスの提供について、ワーキンググループで協議した内容を構想に盛り込んでいくことになる。スケジュールの中で11月から図書館新本館の構想作成、1月に構想案の完成とあるように3ヶ月で協議を行っていくという形になる。具体的にはプロジェクトチームの下部組織にあたる、図書館だけではなく建築の有識者や公募の市民などで構成したワーキンググループで、メンバーの多様性を活かして構想を作っていく。</p>
図書館長	<p>構想を作るにあたってワークショップで出た様々な意見を、どのようにして新本館に反映させるかを構想に入れ込んでいく。基本構想であるため、次年度以降の基本設計にどう落とし込んでいくかの基本となるものとなる。</p>

委員	<p>中心市街地に市立図書館が来てくれることは非常に期待している。商店街や街のみんなが期待していると思う。ワークショップ報告をみるとカフェや軽食が欲しいとか、明るくて安全な広い場所が欲しいとか色々な希望が書いてあったが、どれ一つとっても街に相応しく発展してくれればありがたい。こういった場でみなさんの意見を聞かせてもらい、街に帰った時に関係者に伝えられるという立場で参加している。</p>
委員	<p>立地の場所の関係について、中心市街地に決定するまでの過程で色々と検討があったかと思う。例えば、前橋駅周辺の方が学生や勤めている方が立ち寄れるのでは等の検討もあったかと思う。その中で最終的に中心市街地に決定した大きな理由としては、中心市街地に人が集まって賑やかになってもらいたいという思いがあるのかと思う。市の中でも元気21やテルサ等の公共的な施設を建てる時に同じ様な問題があったと思う。現実的にみると中央公民館の利用者や元気21のプレイルーム利用者に、市の思惑として中心市街地のお店にも行ってもらいたいという考えがあったと思うが、なかなかそうはいっていない。今回図書館を中心市街地に整備する中で、周辺に広場ができたり、馬場川通りが整備される、或いは広瀬川の再整備が行われるといったところと連動して、また中心市街地の珈琲屋等でテイクアウトしたものを広場に持って行って広場で本を読むなど、今までにないような図書館を考えていってほしい。前橋には分館が15分館あるが、分館と本館の役割の違いを考えるべきかと思う。例えば先ほど一つの例としてシルクのお話のあったように、分館のように蔵書を貸し出して読んでもらうだけではない機能が本館には求められるため、そういったものも検討してもらいたい。</p> <p>基本構想についてはコンセプト、方向性を決めるものだと理解している。その方向性を深堀していき、実際にどんな機能を持たせるかを次年度以降決めていくものということによいか。限られた期間の中でどの程度まで我々が議論して決めなければならないのかと責任が重い部分もあるため確認をしたい。</p>
教育長	<p>ビジョンやコンセプトの明確化は12月でおしまいというのではなく、ある一定の方向性を出して大体このくらいの容積が必要ではないかということを出して都市計画決定になっていくかと思う。また来年より詳細を決めていかなければならない状況かと思う。</p>
委員	<p>私達も色々なプロジェクトを抱えて、日々行程表を基に物事を進めているが、今回のスケジュールを見て分からないのが、ここまでワークショップを中心に4ヶ月をかけて、本丸の基本構想の策定を3ヶ月でという行程の踏み方はちょっと私から見ると解せない。つまり物事には調査、分析、戦略、立案というプロセスがある中で、ワークショップをやったというのは調査のごく一部。例えば調査の中には、マクロデータをどれだけこの図書館を建てるために集めているのか。おそらく図書館総合研究所が入ってある程度のデータはあると思うが、データが集まって11月のワーキングの中で初めて分析をしていくのでは、時間的に果たしてどうなのかと感じた。正直に言うとコメントのしようがない。私達も確かにまちづくりでワークショップは行うが、色んなプロセス</p>

の中のごく一部。どうしても見えるところはワークショップだが、例えば馬場川をやるのにワークショップをやりながら、3D都市モデルを作ったり動態モニタリングをやったりとかを同時に行いながら、作戦を立てている。今回この席に来るにあたって、世の中だいたいどのくらい本を読んでいるのかを見て、そのデータがマクロデータとしてどの程度正しいか分からないが、私がたまたま出会ったデータで各県別の読書率ランキングで、1日30分以上の読書習慣がある人の比率の男性の全国最下位が群馬県。女性は案外読むようで19位。ちなみに私が住んでいる栃木県の女性は全国1位で、私から見てもなんでそうなっているのか想像できない。つまり特に男性だが、全国最下位の読書率の県でつくる図書館だという前提で、必要なデータを集めて分析して作戦を立てないと、単なる箱物になってしまう。マクロデータの取得であるとか全部のプロセスが、今のスケジュールで見えてこないし、正直言うと全国最下位の県で図書館を作るのに3ヶ月のプランニングでできるとは私はとても思えない。以上が行程だけを見た印象だが、ぜひ良いものになってほしいと思うし、私たちの街並みにキーププロジェクトだと思っているので、お手伝いできればと思う。

教育長

スケジュールに関して意見が出たが、まちなかの色々な動きと連動していかなければならない、まちなかのプロジェクトを成功させなければならぬという側面もある。そのため図書館側が急いである程度やっていかなければならないということをご理解願いたい。私たちも昨年はどこにできるのだろうということだったため、立地が市街地に決まってから、市街地である意味を感じるようになった。駅前の土地というのも魅力的ではあったが、まちなかに来てみると未来の図書館にこれほどマッチした土地はないのかなと感じている。スケジュールに関してはご指摘の通り、かなり急ピッチで進め、都市計画決定をしっかりと通らなければ図書館のプロジェクトがまたゼロに戻ってしまい、まちなかのプロジェクトは進めることができないということをご理解願いたい。足りない事が多々あると思うが、外部委員のみなさんにご指導いただきながら進めていきたい。

図書館長

図書館としては都市計画の流れに沿って、なるべく今後データも取り込むために、児童生徒、その保護者へのアンケートや市民に広くアンケートというのも計画している。本来もっと時間をかけて行いたい、期間内にできる限り良いものを作っていきたいと考えている。

事務局

みなさん構想スケジュールへの疑問があると思う。通常だと構想があって計画があって設計ということだが、今年構想でその後いきなり設計という形になっている。その順を踏むかどうかはそれぞれだと思うが、構想をどこまで作っていくのかを再確認しておかないといけないと思っている。どういうコンセプトで何をやるのかというのが決まってくると、蔵書数が何冊等色々考えなければならぬことが出てくる。そうすると自ずとこういうことをするにはこういうものが、と全体のボリュームが見えてくると思う。そのあたりを構想の中でやっていくのかと思う。構想を手掛けるには前提条件の整理があって、その中で課題があって、課題に対してどういうことをすればよいかということ

から、新しい図書館のコンセプトが浮き上がってくる。そのコンセプトを実現するためのサービスとは何か、蔵書数ほどのくらい必要なのかという流れがあるかと思う。この課題の整理は既に市で行われてきて、また再開発という全体の流れと複雑に絡み合っていて、このスケジュールが出てきていることと理解している。

図書館業界のトレンドとしては複合化が多くなっている。公共施設の総合管理計画の中で色々な施設をまとめる流れがあるということと、あるいは商業施設を含めて複合化することで集客を生むということをやっていることが多いかと思う。ひとつの最終形みたいなもので北欧ヘルシンキのOodiという図書館があって、そこには図書館と映画館とホールとか色々なものが一緒くたになっている。フィンランドのものを国が違うのでそのまま持ってきてもいいかという問題もあるが、今回再開発で色々な要素が図書館に絡んでくるという意味ではひとつの目標のようなものになる気がする。一方、新しい図書館を考えている中で図書館が一番大事なものはなんだろうということを忘れがちになってしまう。生糸の話があったように、新しく図書館を作るとして外観とか突飛なアイデアとかそういう点に行きがちだが、何を集めるか市民にどういう資料を提供するかを真剣に考えた方がいいと思う。図書館としての中身も素晴らしいし、市民が来てくれる要素もあって、クリエイティビティが市民に伝わるような図書館ができればいいと思う。

委員

本の装丁そのものを見る機会が我々もそうだが、今の子どもたちは本当に少ないと思う。本を作る方々は装丁に非常に熱意を込めて作っている。そこを尊重して、図書館に行ったら背表紙だけでなく装丁がちゃんと見られるということを実際にもやりたいし、できればデジタルでもできたらいいと思う。自身の経験でいうと iTunesMusicStore で音楽配信をやろうとしたときに、CDジャケットの部分で音楽を作っている方と議論になったため、最初からCDジャケット等を見られるデザインにした。そこはCDよりも本の方がもっと強いと思う。デジタル化していくと、この本を探したいという時にはいくらでも探せるし、多分図書館に行くよりもアマゾンで探した方が早いと思う。そうではなくて、デザイン的に気になる、面白そうだなと思って手にするという経験はみなさんあると思う。それがあから本屋に行くとかわくわくする。本は何万冊と凄い蔵書になると思うが、背表紙の状態ですべて並んでいて昔はよかったが、リアル及びデジタル技術を使ってもう少し違う形での見せ方ができたらいいと思う。建物の話ではなく中身のことになるが、どこかの段階で検討してほしい。

教育長

蔵書を考えた時に私たちが揃えるのはリアルな本なのか、その本は電子図書に移っていくのかという議論があり、本はこれからどうなっていくかお聞かせ願いたい。

委員

紙の本は自分の世代では残っているのは間違いないと思う。デジタル化した時に埋没してしまうという問題が大きくて、その部分を埋め合わせができていない。例えば音楽業界でいうと、2001年からピークにアメリカの数字で見ると10億枚CDが販売されていたものが、20年で100万枚まできている。

ところが、ここに来てリアルなCDの売り上げが伸び始めている。やはり手に取って、自分の物として収集ということでアメリカ版のCDブームが再来している。これはどこまでいっても物理的な物ってすごく重要なのではないか。自分自身はすごくリアルを信じている。インターネット越しではなくリアルでないと無理という部分で本に関していうと、コストはもちろん掛かるが、やはり持っている本の良さというもある。紙のように扱えるデジタルデータはどんどんできていくし、技術開発は進むと思うが、おそらく自分が大切に読みたい本は紙として相当残っていくのではないかなと思う。資源問題等でてくると思うが、少なくとも自分の世代ではなくならないと思う。

ただ図書館に対しては、やはり蔵書としてきちんと持っているというのはすごく重要だと思っている。ヨーロッパ等に行くと古文書館として古い文献をちゃんと残していて、しかもそれに対して簡単にアクセスできるのは本当に素晴らしいと思う。紙の本をきちんと蔵書として置くという意味での図書館の機能は極めて重要だと思う。

教育長

将来電子的な図書が増えるからそれほど大きなスペースは図書館はいらなくなるという議論があるが、私はそうではないと思う。何か目的があって選ぶというのは、電子図書はできるが、並んでいる中から選ぶというのはリアルな図書でしかできない。コンテンツとしての図書はデジタル図書でよいが、1冊に対しての熱量はまだ本には勝らないと思う。装丁に関してワークショップを実施して、本というものの価値を認められる前橋市民を育てていこうという話もしている。今後ともお話を伺えたらと思っている。

委員

間違っているかもしれないが、年齢別の読書率は若い世代だと上がっており、一番読んでいないのは50代、60代になる。そういった層が本がどうなってしまうのかということについて現在議論をしていることになる。ゲームやタブレットをやる時間が増えているのにも関わらず、アナログの文字を読む若者が増えており、そこに可能性を感じる。本を実際に読んでない世代が、本がなくなってしまうのではといった議論をしているから、マクロデータと自分の感覚がずれている。そこをちゃんと分析して押さえていかないと困る。

コロナで学校が休みになり、小学校がずっと休校していたとき図書館も休館していたが、蔦屋書店は開いていた。なぜそのような状況になるのかというのは、率直な悩みである。我が家は毎月図書館にいき、本を借りてくるという習慣があるが、学校も図書館も休みだったので、アマゾンで200~300冊の本を購入した。そのニーズに公共の図書館は答えてくれない。

本があるだけではなく、何があっても開いている図書館があったら良いと思う。

事務局

コロナ禍で9割の公共図書館が臨時閉館した。前の話あった、リアルな本とデジタルな話に戻るが、フィジカルなものとはならないはずだ。デジタルはフィジカルと対立的な関係ではなく、新しい使い方や可能性を生み出すものとして考えたほうが良いと思う。公共施設として、緊急事態宣言中に開けるというのはとても難しいため、そういうときはデジタルを活用するなど、市民に対し

教育長	<p>ていろんな選択肢を提供できる図書館を作っていけたらよいと思う。</p> <p>学びを止めないという話になったが、それは子供だけでなく大人もだと思う。どんなときも本が読めるような図書館にできたらと思っている。電子図書に関しては多様な人々が活用できることも重要である。現にある本をデジタルに変えるだけではなく、多様な言語で読めるとか耳で聴けるなど、いろんな機能を使えるのが電子図書の良さかと思なので、今後も検討していきたい。とても有意義な意見交換ができた。</p> <p>【閉会】</p>
-----	---